高専におけるグローバル化の現状

── 茨城工業高等専門学校および本校のグローバル化事業に関する取り組み ──

The Present Situation of Globalization in the College of Industry and Technology: Dealing with the globalization of the National Institute of Technology, Ibaraki College and our school

長森　清 [1)]，福永　堅吾 [1)]，富永　一利 [2)]

Kiyoshi Nagamori [1)]，Kengo Fukunaga [1)]，Kazutoshi Tominaga [2)]

Abstract: What we wish to show in this paper is the present situation of globalization in the college of industry and technology.　To begin with, we describe that The Ministry of Education, Science, Sports and Culture announced a cultivating Japanese with English abilities. So English education of Japan has rapidly been changing recently. Next, we report our inspection of Ibaraki College National Institute of Technology because we are concerned with education of global talents, globalization of the educational environment in this college.　Furthermore, we refer to the Global Engineer Program and Global Communication Oasis in our school.　Finally, we point out some problems about English education in our school.

Keywords: English education of Japan　Globalization　English test

1. はじめに

21 世紀に入り，日本の英語教育が大きく変化している．2001 年（平成 13 年）1 月に出された「英語指導方法等改善の推進に関する懇談会」の報告を受け，英語教育の指導方法の改善や生徒の英語コミュニケーション能力向上などへの提言に始まり，2003 年（平成 15 年）3 月に文部科学省は，「『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想 ── 英語力・国語力増進プラン」を発表した．この趣旨は次のようなものである．経済・社会などのグローバル化が進展するなか，子ども達が 21 世紀を生き抜くためには，国際的共通語となっている「英語」のコミュニケーション能力を身につけることが必要である．このことは，子ども達の将来のためにも，我が国の一層の発展のためにも重要な課題となっている．その一方，現状では，日本人の多くが，英語力が十分でないために，外国人との交流において制限を受けたり，適切な評価が得られないといった事態も生じていると同時に，しっかりとした国語力に基づき，自らの意見を表現する能力も十分とは言えない．このため，文部科学省は日本人に対する英語教育を抜本的に改善する目的で，具体的なアクションプランとして「『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想 ── 英語力・国語力増進プラン」を作成することとしたとある．

1) 東京都立産業技術高等専門学校　ものづくり工学科　一般教養
2) 東京都立産業技術高等専門学校　ものづくり工学科　生産システム工学コース

「英語第 2 公用語化」,「発信型英語教育」などの言葉が巷の声として見聞されるようになってきた．しかしながら，おおよそ多くの人は英語 4 技能のうちどれもが習得不十分であったとしても，日常生活を送る上においては，特に不利益を被ったり，不名誉な思いをしたり，不都合な場面に出くわしたりすることはない．従って，いくら英語圏の国々で起こりそうなシチュエーションを設定してみても，単なる会話文のロールプレイだけでは，その場限りの発話練習になってしまう場合が多く，徹底したコミュニケーション能力を獲得させるという次元には至らない．また，授業内容は，語彙や文法事項・構文の説明・英文の内容説明といった教師主体の授業のみで旧態依然であった．

文部科学省は「『英語が使える日本人』の育成のための行動計画」を公表してから 5 年間の計画で，中学校，高等学校を卒業したら英語で外国人とコミュニケーションができ，大学を卒業したら仕事で英語が使える人材を育てることを目標とする「スーパーイングリッシュランゲージハイスクール（SELHi）」という事業を始めた．SELHi 指定校は 169 校で実施され，英語授業の改善，英語教員の指導力向上や指導体制の充実，生徒の英語モチベーション向上，入試での評価改善などが行われた．

これらの現状を踏まえ 2009（平成 21 年）年 3 月 9 日に高等学校の新学習指導要領が告示され，2013 年（平成 25 年）4 月から施行された．この学習指導要領は，教育基本法や学校教育法の改訂などに伴って，従来にない大きな変化が含まれているものだが，こと外国語科（英語科）では，科目構成の大幅な変更があり，近年類を見ない大規模な改訂となっている．また，文部科学省は，2012 年（平成 24 年）から大学においても，文部科学省事業「グローバル人材育成推進事業」に 42 の大学が採択され，2014 年（平成 26 年）には「スーパーグローバルハイスクール（SGH）」の指定校 56 校を発表した．

このような時代のなかで，高等専門学校においても，グローバル人材を育成することが大きな課題となっている．そこで本論では，グローバル高専モデル校に指定された茨城工業高等専門学校の視察を踏まえ，本校での取り組み，今後の課題を述べる．

2. 茨城工業高等専門学校視察について

2016 年（平成 28 年）3 月 15 日，生産システム工学コース教授・富永一利，一般教養科准教授・長森清，一般教養科助教・福永堅吾の 3 名は，茨城工業高等専門学校（以下，茨城高専）を視察する機会を得た．茨城高専は，2014 年（平成 26 年）6 月に独立行政法人国立高等専門学校機構より「グローバル高専モデル校」に指定され，その教育改革・教育活動が注目されている．敷地内に足を踏み入れてまず目に入ってくるものは，主たる表記が英語となっている校内案内板である．留学生ないし外国人研究者への配慮であるのは当然のこと，それと同時に，グローバル化の波は，学生のすぐ身近に来ていることを示唆する手立てともなり，学生への教育的配慮ともなるのである．案内にしたがって到着した応接室で，まずはこの学校が取り組むグローバル化教育について解説いただき，そののちに意見交換，構内施設の見学をおこなった．

茨城高専がグローバル化に向けた教育改革に着手したのは 2011 年（平成 23 年），日下部治氏が第 9 代校長に就任した年であった．同校ではグローバル高専モデル校として，つぎのような取り組みをおもな柱にして教育をおこなっている[1].

1. グローバル人材の育成
   英語による授業，第二外国語習得，異文化理解・地球課題理解，情報発信力強化
2. 教育環境のグローバル化
   ICT を用いたアクティブラーニングの実践，アクティブラーニング環境の構築，キャンパス環境構築

3. 連携によるクローバル化

地域・国際連携型教育，他高専等との連携，海外インターン

ここでは，上記 3 点のうち「1. グローバル人材の育成」の「英語による授業」についての報告と，上記には含まれていないが，見学した図書館および学生寮について述べてみたい．

2-1. 英語教育への取り組み

茨城高専の教育改革はまず，「英語による授業」を導入することからはじまった．例えば「国際経営学」では，英語による講義と日本語によるディスカッションを行う．あるいは機械システム工学科の「応用計測工学」では，すべて英語で講義する[2]．本科生 1 年から 3 年は GTEC for STUDENTS を，4 年と 5 年は TOEIC Test を全員が受験する．先述のとおり，現行の「学習指導要領」には中学校のみならず高等学校においても英語の「授業は英語で行うことを基本とする」旨が明記されているが，高専における英語教育は，高等学校におけるそれのように 4 技能のスキルアップのみが目指されるのではなく，高専という場でなくてはもちえない強みをいかして，高度な専門性を保った内容を英語におきかえた教育を提供するわけである．高専における英語教育は，高等学校のそれとは一線を画してしかるべきなのである．

ただし，こうした英語教育により他の専門科目の教育が圧迫されてはならず，なおかつ英語教育が英語科の教員に一任されてもならない．英語教員に計り知れない負担がかかるからである．こうした障壁は，先述のような英語でおこなう専門科目の授業のように，専門と英語をドッキングさせることでクリアできる．さらに，事務職員にも国際感覚のある人材がそろっており（たとえば TOEIC が 800 点台から 900 点台であったり，アメリカの大学院を修了したというような英語力を備えたスタッフが入職している），教職員が相互に協力できる体制が構築されている．

「なるべくお金をかけないこと．そしてやれることを，やれる人がやる」と日下部氏はいう．すでに手元にあるものをいかして，足りないものを補ってゆきながら，ホームグラウンドを固める．大切なのは，だれかに任せるのではなく，いま高専がおかれている「グローバル化」という現状を把握して，教職員がそれぞれで引き受けることである．そうして出来上がったホームグラウンドに立って，他高専との交流や，海外インターンシップに力を入れ，地域・国をまたいで連携をはかりながら，学校が一丸となって土壌をさらに豊かにしてゆく．

2-2. グローバル化をめざす高専の図書館

茨城高専の施設を見学したなかで，図書館の充実ぶりが印象に残っている．グローバル化を推進する高専の取り組みのエッセンスが，凝縮された図書館である．視線は本に向けられながら，意識はその先の広い世界へと向けられる工夫がなされていた．

入口付近には，日下部校長のアイデアで地球儀が置かれている．それを目にする者に世界の広さを意識させる．それと同時に，英語を身につけたところで，それは広い世界における英語話者の 1 人となったにすぎず，さてそこからどのようにグローバルな舞台で振舞おうかを考えることの必要をも示す．そんな装置としての地球儀である．

蔵書について興味深かったのは，旅行ガイドブックが充実している点である．日本人の海外旅行者に人気の『地球の歩き方』（ダイヤモンド社）や，世界的な人気を誇る *Lonely Planet*（Lonely Planet 社）がそろえられている．旅行ガイドなどは肩肘はらずに世界の都市の顔をのぞくことのできるアイテムあり，いつか

そこに行ってみたいという意欲をかきたてるツールともなる．

語学学習のテキストも豊富である．先述の語学試験の対策テキストとして TOEIC Test，TOEFL，英検，IELTS[3]，TEAP[4]など，周到にそろえられている．あるいは Penguin Readers や Oxford Bookworms といった多読テキストのシリーズも，用意に抜かりがない．

さらに，英語で書かれた専門書の多さは瞠目すべき点であった．先述のとおり，茨城高専では専門科目の授業を英語で行っている．その当該科目における参考書や関連書籍にも洋書を用意することで，海外の研究者の知見によって学生の視野を広げる用意を万端にしている，ということである．

2-3. 学生寮

「有朋寮（ゆうほう）」と名付けられている茨城高専の学生寮，そのなかの男子寮「新友館」を見学した．折しも改築されて，真新しい床やキッチン，洗面台を学生が見れば，きっとそこでの生活に心躍らせるだろうと，容易に想像される．この寮でもキーワードはやはり「グローバル」である．つまり，日本人学生と留学生とが共同で生活を送ることで，国のちがいを超えたコミュニケーションを取りながら寝食を共にする空間としての寮なのである．いってみれば，日本で高専生活を送りながら，外国でのシェアハウスを体験できる仕掛けとなっているわけで，寮を併設する国立高専であればこそなし得る工夫と言えよう．

2-4. まとめ

高専教育を終えた学生が，グローバル化の進む社会へと繰り出す．するとその社会には，すでに海外を相手にスキルを高めたような人々もいて，卒業生はかれらとの競争を免れえなくなる．つまり，グローバル化された土俵で互角に闘いうる学生を育てる，というのがいま必要とされる高専教育のあり方だと言える．高等専門学校は，かつては高度経済成長期にあった日本を支えるエンジニアの育成が目標であったが，いまやグローバルなフィールドで活躍できるエンジニアの育成をその目標の一つに据えるときにあるのである．グローバル化された社会に進む学生の育成には，学校が一丸となって教育体制を整える必要のあることを，たとえば図書館や学生寮など日常生活の一部として存在する空間にも工夫をこらす茨城高専の取り組みから学んだ．

3. 本校におけるグローバル化の取り組みの現状

本校の国際化推進センターは，主に 6 項目の学生向け国際化事業を行っている．外国人留学生に母国文化を紹介してもらう「異文化理解プログラム」，夏季休業中にアメリカ・シアトルで語学研修・ホームステイ・工場見学などを経験する「グローバルエンジニア育成プログラム」，シンガポールのニーアン・ポリテクニックの学生を本校に受け入れ，学生同士の交流を行う「学生国際交流プログラム」，首都大学東京・産業技術大学院大学の学生とともに課題を解決する「グローバルコミュニケーションプログラム」，海外の日系企業での「海外インターンシッププログラム」，校内で外国人と英会話が楽しめる「国際交流ルーム」である．ここでは 2015 年（平成 27 年）度のグローバルエンジニア育成プログラムの報告，品川キャンパスにおける国際交流ルームの利用状況と現状，外国語科で取り組んでいる英語検定試験の品川キャンパスにおける平均スコアの推移を通して，本校におけるグローバル化の取り組みの一端を述べることにしたい．

3-1. グローバルエンジニア育成プログラム[5]

海外で活躍するエンジニアとなるための態度を涵養するため，海外体験・英語学習・工場見学・先端技術

に触れる機会を通して，海外のものづくりを取り巻く環境を学び，将来，海外に「チャレンジ」するための足掛かりを提供することが本プログラムの目的である．また，以下に示す5項目の内容をすべて受講し，発表を行った上で報告書が受理された場合，学生は学外学修単位として1単位修得できる．

①国内における事前学習
②現地での語学研修の英語レッスン
③現地での工場，施設，大学等の見学・調査など
④現地での英語による調査報告会
⑤帰国後の事後学習，報告書作成および発表会

訪問先シアトルは，アメリカ西海岸の最北に位置し，カナダとも国境を接するワシントン州の最大の都市である．商業・工業も盛んで生活水準や文化水準は高く，比較的安全で生活しやすい街として知られている一方で，近年物価上昇が著しいことが指摘されている．シアトルは，日本からの直行便は外資系を含めれば1日3便程度運行されており，ボーイング社やマイクロソフト社をはじめとした世界的な技術系企業の本拠地でもあるため，工場見学先の選定の容易さなどといった観点から，本プログラムの実施には適した場所である．

現地での宿泊形態は2人1組でのホームステイである．学生はホームステイをしながら英語のコミュニケーション能力を養い，アメリカのライフスタイルや文化の一部を体験する．海外での滞在が初体験の学生が多い本プログラムでは，最適な宿泊形態であると考えられる．またこの形態は，学生の受け入れ先となるホストファミリーも，業者が厳選した上で学生とのマッチングを取っているため，保護者にとっても安心できるものである．

平成27年度の研修日程は9月2日（水）から9月11日（金）の8泊10日で，参加学生は研修期間中，日誌の提出が毎日求められる．訪問先が企業・大学・博物館・ボランティア施設・市街地などかなり多く，これと併せて語学研修も行われるため，10日間の研修期間では，非常にタイトなスケジューリングが問題点となっている．Table.1に平成27年度のスケジュールを示す．

Table. 1　**平成27年度プログラムスケジュール概略**

	日付	都市名	交通	時間	スケジュール
1	9/2 (水)	成田		15:00 17:30	各自，成田空港へ集合 搭乗・出国手続き シアトルへ　　(機内泊) ・・・国際日付変更線通過・・・
		シアトル タコマ レドモンド ショアライン	専用 バス	10:50 午後	シアトル・タコマ空港着，入国手続き 各自昼食 マイクロソフトビジターセンター訪問 ホストファミリーの待つスタディーセンターへ ホストファミリーと対面し，各家庭へ（ホームステイ）
2	9/3(木)	ショアライン シアトル	専用 バス	09:00 13:00 16:00	英語のクラス(09:00～12:00) 英語の課外活動(13:00～16:00) Northwest Harvest にてボランティア活動 (ホームステイ)

3	9/4(金)	ショアライン シアトル	専用 バス	09:00 11:00 16:00	英語のクラス(09:00～10:30) 英語の課外活動(11:00～16:00) (1)航空博物館見学 (2)ワシントン大学にて現地学生と交流 (ホームステイ)
4	9/5(土)	ショアライン シアトル	専用 バス	09:00 16:00	終日見学研修 (1)エバレット・ボーイング工場見学 (2)ゲストスピーカー(高専 OB)の講演 (3)シアトル市内見学(パイクプレースマーケットなど) (ホームステイ)
5	9/6(日)	ショアライン		終日	終日ホストファミリーと過ごす（ホームステイ）
6	9/7(月)	ショアライン		終日	祝日（Labor Day） 終日ホストファミリーと過ごす（ホームステイ）
7	9/8(火)	ショアライン		09:00 13:00 16:00	英語のクラス(09:00～12:00) 英語のクラス(13:00～16:00) プレゼンテーションワークショップ終了 (ホームステイ)
8	9/9(水)	ショアライン		09:00 13:00 17:00 18:30	英語のクラス(09:00～12:00) 英語でのプレゼンテーション さよならパーティの準備(13:00～16:00) 修了式(修了証授与)とさよならパーティー 終了 (ホームステイ)
8	9/10(木)	ショアライン シアトル タコマ	専用 バス	09:00 09:30 12:40	ホストファミリーと朝食後，研修センターへ集合 専用バスにてシアトル・タコマ空港へ 成田へ
10	9/11(金)	成田		15:00	成田空港着，入国手続き後，解散

3-1-1. 主要訪問先

Microsoft Visitor Center

シアトルに着いて最初の訪問地は，マイクロソフト社の一角に設けられた，ショールーム兼記念品販売店である．タブレット，スマートフォン，KinectやXboxの体験コーナーがあり，学生たちは楽しく過ごしていたように見受けられる．見学中は特に説明員の解説がないため，2時間弱の滞在時間で十分であったと思われる．初日に訪問した理由としては，時差ボケの解消や疲れた学生が少し休憩できる場所にもなるからである．あくまでもショールームのため，学生に過度の期待を持たす訪問先ではない．今後，マイクロソフト社の日本人技術者の方から仕事内容などの説明が聞けると，学生にとってはより有意義な訪問先になる．

Northwest Harvest

アメリカでのボランティア状況を体験するため，ボランティア施設North Harvestを訪問した．パスタを袋詰めして箱に入れる梱包する作業を行った．誰でもできる単純な作業であったためか，またスタッフの説明も比較的簡単な英語で理解しやすかったようで，作業は効率的に分担して行われ，予定よりも早い時間に終えることができた．事前学習においてアメリカでのボランティア活動の社会的位置付けについて調べておいたことで，全員の学生が特に抵抗なく積極的に作業に取り組んでいた．

Museum of Flight

ここは，世界各国の航空機が展示してある施設であり，展示は第一次世界大戦，第二次世界大戦の戦闘機をはじめ，飛行機やボーイング工場の歴史，スペースシャトル，エアフォースワンなどの実機も展示されて

いる. 引率教員は事前に博物館のガイドスタッフに解説を依頼し, 館内展示物の概略を解説していただいた. 事前学習において調べていたこともあり，また飛行機などに興味のある学生も多く，ガイドスタッフの英語の説明も専門的であったが，学生は意外と内容を理解していたのには引率教員も驚いた．滞在時間がおよそ90分であり全体的に時間が短く，また90分の見学時間のうち，説明員に本来の依頼内容とは異なる説明に60分程度費やされてしまい，自由に見学できる時間が30分程度となってしまい，急遽時間を延長した．航空博物館は高専の学生にとって，興味の持てる訪問先であるため，自由に見学させてもよかったように思えた．

University of Washington

ワシントン大学では, ワシントン在住の日本人学生のボランティアグループ8名とグループディスカッションする時間を頂き，貴重な体験談を聞くことができた．本校の学生との質疑応答も活発に行われ，文科省の奨学金制度がある事を知り，海外生活や留学について具体的に思い描く学生もいた．今回の訪問の成果は，全体として留学に対する心理的なハードルが下がり，経済的なハードルも乗り越えうることがわかったことが大きな成果である．その後学内を案内していただき，趣のある図書館などの建築物などの見学を行うことができた．ワシントン大学は医学部，看護学部が有名で，エンジニアとはかけ離れている．今後は，シアトルにあるAviation High SchoolやTechnical Collegeなどで同じ目標を持っている同世代の学生とコミュニケーションを取れたら，より有意義なものになると考える．

Everett Boeing Factory

世界最大の航空機製造会社，ボーイング工場は，写真撮影が禁止されているため，カメラや携帯電話は入口のロッカーに預けて見学を行った．世界最大の工場だけあって，敷地内の移動はバスで，90分程度の見学時間を英語でガイドされながら, 展望デッキからB747-8やB787の組み立てを見ることが出来た. ただ残念ながら土曜日のため工場が稼働していなかった．ラインが稼働している様子や，工場で働く人たちの様子を間近で見学した方が教育効果はより高いと考えられるため，今後の見学では平日にボーイングの工場見学が行えるような調整が必要である．

またボーイング社の工場について簡単な下調べを課題としていたため，学生には工場の歴史などは比較的理解しやすかったように見受けられる．工場見学終了後，学生は，本校の前身校のひとつである都立航空高専卒業生でボーイング社員の大道氏の講演を聴講した．海外生活の苦労話や日本との文化の違いなどについて，興味深い講話を聞くことができ，この講演は学生にとって大きなプラスとなった．このボーイング工場は非常に満足度の高い訪問先でもあり，今後も是非訪問してもらいたい場所のひとつである．

Pike Place Market

本プログラムで唯一の観光地である，Pike Place Marketは，日系移民に関する絵画も飾られおり，日系移民との係わりが深い市場であることを学生は学んだ．この絵画は，第二次世界大戦前後の日系農業者従事者の暮らしを描いたものである．市場が出来た当時は，日系人が作った野菜なども並べられていたが，第二次次世界大戦が勃発すると，日系人たちは強制移住させられた歴史があった．また，スターバックスの1号店やメグ・ライアン，トム・ハンクスの主演の映画で大ヒットした『めぐり逢えたら』(1993年)の舞台となったレストランもあり，この場所は多くの観光客で賑わっていた．見学時間は2時間程度であったが，連休中ということもあってどこも混雑しており，スターバックスでお土産を購入するための行列でほとんどの学生が時間を費やしてしまい，歴史や文化的な見どころを見学するための時間が十分確保できなかった．

シアトルの歴史や文化的な背景を十分見学するために，やはりシアトル市街の見学は終日費やすべきである．シアトルマリナーズの本拠地であるセーフコ球場内部の見学ツアーを含め，見るべきものが数多くあり，見学を通して学ぶシアトルの成り立ちの歴史など極めて興味深く，この場所は異文化理解の一助となる．今後，是非見学スケジュールに入れたいと感じた．

3-1-2. ホストファミリー

厳選されたホストファミリーと学生とのマッチングが図られ，極めて質の高いホームステイが実現した．ホストファミリーは，面倒見もよく健康面にも生活面にも配慮して頂き，休日は様々な場所へ連れて行ってもらうなど学生たちもストレスなく楽しく過ごせたようである．

3-1-3. 英語研修

英語研修は，9月3・4・8・9日の4日間，午前9時から12時まで行われた．学習グループはあらかじめ語学学校で行われたテスト結果に基づいて分けられている．授業の質は極めて高く，学生を飽きさせない工夫が随所に見られた．学生は，ボーイングの工場に行く前には，予習として英語でボーイングの予備知識や使われそうな単語や表現などを勉強していた．また，ホームステイで使えそうな表現や，宿題としてホームステイ先の家族にする質問などが課されるなどしていた．研修は，全体的にリラックスした雰囲気で授業が行われ，休憩時間は特に設けられておらず，講師が学生の様子を見て適宜設けられていた．英語教員として感じたことは，英語研修自体の時間が短いのが残念でならない．次年度以降のスケジューリングについては検討が必要である．

3-1-4. プレゼンテーション

今回のプログラムでは，学生にシアトルの生活で印象に残ったものを，英語でプレゼンテーションする授業が行われた．前日までに引率教員に発表する写真を3枚提出し，作成した原稿に基づいて，最後の授業において1人当たり3分から5分程度で発表練習ならびに発表を行った．各グループにて投票で1名の代表者を選び，その学生が参加学生全員の前で一度発表を行った後，さよならパーティーにてホストファミリーの前でも発表を行った．1回目の発表では原稿を読み下す学生が多かったが，2回目以降は身振り手振りを交えて原稿を読まずに聴衆を見ながら発表を行えていた．さよならパーティーの内容を決めるのに時間がかかり，プレゼンテーションの練習をする時間が十分に取れなかったのは残念だったが，学生たちは限られた時間のなかで，最大限の努力を払っていた．

プログラムの最後にさよならパーティーを行った．ホストファミリーを含めて100名程度が参加するパーティーのため，最終日の午後は準備を行った．このパーティーは，計画から実行まですべて学生が行ったため，計画の段階でかなり混乱したが，感謝の気持ちと心のこもったパーティーになったと思われる．

3-1-5. 感想と今後の課題

帰国してから10日後，シアトルは世界の注目される都市となった．中国の習近平国家主席が訪米の最初の訪問地としてシアトルに滞在し，3日間の滞在中にマイクロソフト社やボーイング社などの米企業を訪問した．シアトルでは経済外交を主な目的とし，政治外交の場となるワシントンDCよりも日程が早く組まれたことは，いかにシアトルが重要な都市であるか改めて認識した．

この10日間のプログラムで多くの学生が，英語でコミュニケーションする楽しさと難しさを感じ，英語学

習へのモチベーションが高まった．また将来，海外の大学で学びたい，海外で働いてみたいと言ってくれた学生がいたことは，引率教員にとってもっとも嬉しかったことであった．それと同時に，学生たちがホームステイ先の家族と仲良くしている姿を見て，若者たちの適応力と柔軟性には羨ましさも感じた．今後も多くの学生たちが海外を体験して，グローバルエンジニアとして活躍してほしいと願うとともに，引率教員も学生たちと共に学びながら，学生たちの力になりたいと感じた10日間であった．

プログラムの内容は，10日間の研修ではやはり短く，日程も詰まっているため，2週間での実施が望ましい．また，今後強く要望したいのは，同世代の学生との交流である．シアトルにあるAviation High SchoolやTechnical Collegeの学生と同じ時間を過ごすようなプログラムが，国際的な技術者としての意識の植え付けには最適であり，今後より重要となる．

3-2. 国際交流ルームの利用状況

2013 年（平成 25 年）6 月，国際感覚を養う目的で国際交流ルーム（Global Communication Oasis，以下 GCO）が開設された．GCO では，ネイティブ講師の英会話レッスンを受けたりやフリートークを楽しんだり，海外の DVD や資料などを自由に閲覧できる．ここでは 2014 年度～2016 年度 6 月までの品川キャンパスの GCO の利用状況を見て，現状と改善点を述べることにしたい．

Table. 2　2014 年度ＧＣＯ利用状況

品川キャンパス	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	累計
英会話カフェ	7	4	4	7	–	20	6	2	1	8	–	59
英会話レッスン	4	4	6	5	–	16	4	5	4	5	3	56
GCOルーム管理（OPEN DAY）	19	16	17	3	–	49	8	5	24	22	3	166
グローバルエンジニア育成プログラム英会話指導	–	–	–	–	80	–	–	–	–	–	–	80
学生交流プログラム事前英会話指導	–	–	–	–	45	–	–	–	–	–	–	45
学生交流プログラム事前準備	–	–	–	–	–	48	–	–	–	–	–	48
国際交流プログラム企画運営	–	–	–	–	–	42	–	–	–	–	–	42
留学相談会	–	–	–	–	–	–	15	–	–	–	–	15
TOEIC講座	–	–	–	–	–	–	–	–	123	–	–	123
海外体験セミナー	–	–	–	–	–	–	–	–	17	–	–	17
合計	**30**	**24**	**27**	**15**	**125**	**175**	**33**	**12**	**169**	**35**	**6**	**651**

2014 年度（平成 26 年度）は年間 651 人（延べ人数）が利用している．学年別の利用学生数までは把握できていないが，GCO の様子を見ると，特定の学生がほぼ毎日利用していた．その意味では意欲のある学生にとっては，とても利用価値のある施設である．しかし一方で，特定の学生だけが利用して，他の学生にとって入りづらくなっているのも事実であった．

Table. 3　2015 年度ＧＣＯ利用状況

品川キャンパス	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	累計
英会話カフェ	3	0	8	37	0	4	7	0	0	14	0	73
英会話レッスン	11	10	5	8	0	14	54	51	3	0	0	156
GCOルーム管理（OPEN DAY）	19	30	17	14	5	38	26	28	34	26	0	237
グローバルエンジニア育成プログラム英会話指導	0	0	0	0	56	0	0	0	0	0	0	56
学生交流プログラム事前英会話指導	0	0	0	0	0	51	0	0	0	0	0	51
学生交流プログラム事前準備	–	–	–	–	–	44	–	–	–	–	–	44
国際交流プログラム企画運営	0	0	0	0	0	104	0	0	0	0	0	104
留学相談会	0	0	0	0	0	0	11	0	0	0	0	11
TOEIC講座	0	0	0	0	0	0	0	0	167	0	0	167
海外体験セミナー	0	0	0	0	12	0	0	0	0	0	0	12
合計	**33**	**40**	**30**	**59**	**73**	**255**	**98**	**79**	**204**	**40**	**0**	**911**

2015 年度（平成 27 年度）は年間 911 人（延べ人数）が利用している．その内訳は，1 学年 440 人，2 年 104 人，3 年生 113 人，4 年生 199 人，5 年生 22 人，その他 33 人となっている．2014 年度に比べて利用者数は大幅に増えたことがわかる．学年の利用者数を見ても，5 年生の利用は極端に少ないのがわかる．学年が上がると利用しづらい傾向にあり，いかに低学年から積極的に利用させるかが大きなポイントになる．そこで，1 年生に積極的に声を掛けたことが利用者数の大幅増加の理由である．その 1 年生がシンガポールのニーアン・ポリテクニックの学生との学生国際交流プログラムにも多くの学生が参加した．参加学生の 7 割が 1 年生であったことは，今後大きなプラスになる．この 1 年生が卒業するまで継続的に GCO を利用したり，国際交流プログラムに参加してくれれば，全体の利用者が更に増えると考えられる．また，4 年生の利用者数が多いのは 12 月に行う TOEIC 対策講座への参加が多かったからである．

GCO は，ただ英語でコミュニケーションをとる場所としてだけでなく，海外体験セミナー，ハロウィンパーティー，クリスマスパーティー，TOEIC 対策講座などを開設する場所としても機能している．海外体験セミナーは，グローバルに仕事をされている社会人講師を招いて体験をお話ししていただくものである．2015 年度は高専を卒業した方で，「英語を使って海外で磨く技術職キャリア」と題して講演をしていただき，講演終了後も学生から質問が上がるなど，社会に出たあとでいかに英語を使ってゆくのか，実際的な話に触れられるため，学生にはとてもよい機会である．これは茨城高専が取り組んでいるグローバル教育講演会[6]と同じ役割を果たしていると言える．

GCO 全体的な課題は，5 日間または 3 か月間の TOEIC 講座などを行っても，回数を重ねるごとに人数が減少傾向にあり，全日程を休まず参加する学生が多くないことである．継続的に出席できるように工夫をしなければならない．

Table. 4　2016 年度ＧＣＯ利用状況（10 月末現在）

品川キャンパス	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	累計
英会話カフェ	46	33	17	6	0	0	55	0	0	0	0	157
英会話レッスン	24	105	69	49	0	0	126	0	0	0	0	373
GCOルーム管理	59	79	37	15	0	0	43	0	0	0	0	233
グローバルエンジニア育成プログラム英会話指導	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
学生交流プログラム事前英会話指導	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
学生交流プログラム事前準備	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
国際交流プログラム企画運営	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
海外体験セミナー	0	0	0	0	0	0	28	0	0	0	0	28
留学相談会	0	0	0	0	0	0	9	0	0	0	0	9
TOEIC講座	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合計	129	217	123	70	0	0	261	0	0	0	0	800

2016 年度（平成 28 年度）10 月現在で 800 人（延べ人数）の学生が利用している．その内訳は 1 学年 298 人，2 年 199 人，3 年生 143 人，4 年生 127 人，5 年生 8 人，その他 25 人となっている．2014 年度，2015 年度の 10 月に比べて利用者数は大幅に増えたことがわかる．Table 2，3 では，グローバルエンジニア育成プログラム英会話事前指導，学生国際交流プログラム事前英会話，事前準備，企画運営への参加人数が含まれていたが, Table 4 にはそれらの数が含まれていない. それにも拘らず, 利用者は大幅に増えたことになる．これは，グローバルエンジニア育成プログラムに参加を希望する学生に対して，GCO の積極的な利用を促したことが主な要因である．

また 2016 年度は，利用者を増やすため工夫したことがある．それは，学生が目的に合った英語学習をできるように，開設講座を増やした点である．例えば前期の毎週月曜日には，TOEIC 講座（9 回）を開設した．12 月の直前講習だけではなく，年間を通して計画的に TOEIC の勉強をしてほしいとの思いからである．その結果，4 年生の学生の利用が例年のこの時期よりも多くなっている．また前期の毎週火曜日には，訪日外国人旅行者のためのボランティアガイドの講座（9 回）を 12 名定員で開設した．ここでは 2020 年（平成 34 年）の東京オリンピックに向けて，外国人旅行者にどう話し掛けるとよいのか，おもてなしとはなにか，日本のよさを伝えるにはどうすればよいのかなど,「おもてなし英語」を楽しみながら学習できる．開設理由は 2020 年に東京オリンピックが開催されることと，シアトルに参加する学生が日本のよさを伝えるきっかけになればと思ったことである．その他にも English through Science というイベントを企画し,「英語で電子回路・LED を学習」（定員 12 名）を行った（2016 年（平成 27 年）7 月）．これは外国人講師と一緒に，回路をつなぎ，LED を光らせるための基本を英語で学ぶという催しで，コンデンサが内部に電気を蓄える性質があることも実験を通じて学習でき，学生からは大変好評であった．同企画の第 2 弾では,「英語でプラネタリウム制作」（定員 15 名）を行った（2016 年（平成 27 年）11 月）．いずれの企画も，ものづくりをしながら外国人講師とコミュニケーションが取れると好評で，今後もこのような催しを開いていきたい．2016 年度後期に開設したエンジニア英語講座や TOEIC 講座にも多くの学生の受講申し込みがある．特にエンジニア英語講座は今年度初めて開設したが，学生からの応募が多く定員 10 名のところを 35 名で行い，学生は休まず出席をしている．こうした企画などを通して GCO の楽しさを知った 1 年生が，多く利用するようになったのは嬉しい傾向である．今後も学生のニーズに合わせながら，GCO をできるだけ利用してもらえるように工夫していきたい．

4. おわりに

茨城高専の視察報告および本校のグローバル化に対する取り組みについて述べた．グローバル化高専のモ

デルとして躍進する茨城高専から学ぶべき点や，ぜひとも取り入れてゆきたい取り組みは数多くある．本校は寮を有していないために，茨城高専のように留学生とシェアハウスをするような活動は実現が難しいが，例えば英語の校内案内板や図書館の整備は，本校でも工夫しだいで実現可能な部分であろう．今後も他の高専や高等教育機関での視察や意見交換を通して，本校のグローバル化推進事業に貢献できる部分を増やしてゆきたい．

本論 3-2 で述べたように，本校の GCO では学生の学習機会を増やすべく，多種の企画をセッティングして，利用学生数を着実に増加させている．この取り組みは，本校での英語の授業時間数の不足という課題解決の一助ともなっているのではないかと考える．本校のカリキュラムは，1 年次には「英語 I」が 4 単位，選択科目として「基礎英語演習 I」が 1 単位，いずれも 45 分×単位数になる．しかし，多くの高等学校のカリキュラムは，「コミュニケーション英語 I」を 4 単位，「英語表現 I」を 2 単位として 50 分×6 単位数となる．その他に学校設定科目として 1 年次に「英語会話」，2 年時からは大学受験対策の科目なども設定している．したがって高専における英語の授業時間数は，高等学校におけるそれのおよそ半分の時間になる．限られた時間数のなかで，いかに高専学生に英語力をつけさせるかについては，今後も大きな課題である．この点は，例えば多くの学生に GCO を利用してもらうことで解消できる面もあると考える．

過去 4 年間の GTEC for STUDENTS Basic，TOEIC Bridge，TOEIC の各試験の平均スコアは，少しずつではあるが上がっているのがわかる．しかしながら，TOEIC 受検においても本校の学生には解消すべき点がある．センター試験を経験している大学生は，高校 3 年時に 80 分のリーディング，約 30 分のリスニングの練習問題を多くこなしているが，本校の学生の多くは英語試験の受検に慣れていないため，75 分のリーディングと 45 分のリスニングにおける集中力が続きづらいという弱点がある．この点についても，英語の授業内での継続的な演習や，GCO で開設する TOEIC 対策講座をうまく利用させ，弱点の克服を試みさせる．

英語検定試験平均スコアの推移（品川キャンパス）[7]

1年　GTEC Basic

	Total	Listening	Reading	Writing
H24(2012)年度	386.4	149.6	146.2	90.7
H25(2013)年度	372.3	143.2	134.6	94.6
H26(2014)年度	375.8	149.3	137.4	89.1
H27(2015)年度	381.6	146.4	141.0	94.2

2年　GTEC Basic

	Total	Listening	Reading	Writing
H24(2012)年度	368.4	143.2	136.1	89.1
H25(2013)年度	380.8	147.6	145.0	88.2
H26(2014)年度	382.0	151.2	140.7	91.2
H27(2015)年度	389.6	153.5	147.4	88.4

3年　TOEIC Bridge

	Total	Listening	Reading
H22(2010)年度	115.8	60.3	55.5
H23(2011)年度	114.8	59.4	55.4
H24(2012)年度	115.8	60.7	55.1
H25(2013)年度	115.1	58.0	57.1
H26(2014)年度	116.1	59.7	56.4
H27(2015)年度	119.2	59.2	60.0

4年　TOEIC

	Total	Listening	Reading
H22(2010)年度	297.0	179.4	117.6
H23(2011)年度	298.7	180.3	118.3
H24(2012)年度	297.0	179.2	117.8
H25(2013)年度	320.0	199.8	120.2
H26(2014)年度	309.1	189.0	120.0
H27(2015)年度	334.3	202.9	131.4

2016 年度（平成 27 年度）より，本校 3，4 年の全学生に TOEIC 受検を義務づけ，他の学年は希望者のみ自由受検としている．そのため，特に 1，2 年の学生について，外部試験によって客観的に英語力を計る機会がなくなったことが，新たな課題として浮上している．外部試験ではないものの，新入生に対しては本校の外国語科の教員が独自で作成した英語の基礎学力診断試験（「英語学習到達度チェック」）や「英語に関するアンケート」をおこなって，年度ごとの新入生の英語習得の具合や英語学習に対する意識について，記録を

とっている．今後も継続的に試験およびアンケートをおこない，分析結果をもとに学生の英語力をいかに向上させるかを考えてゆく．

5. 注

[1] 茨城工業高等専門学校：2014 年度版グローバル高専事業報告（印刷版），3 頁．下記 URL で 2015 年度版を閲覧できる．http://www.ibaraki-ct.com/pamphlet/global2016/index.html#page=1

[2] 残念ながら，今回の視察では教養科目の「英語」を担当される英語教員の方からは直接お話を伺えなかったため，またの機会に英語の授業運営について意見交換をおこないたい．

[3] IELTS（アイエルツ）は International English Language Testing System の略称で，イギリス，オーストラリア，カナダ，ニュージーランドの多くの高等教育機関において英語力の証明として認められている英語試験である．アメリカでも TOEFL に代わって入学審査の際に採用する教育機関が増えている．

[4] TEAP（ティープ）は Test of English for Academic Purposes の略称で，上智大学と公益財団法人日本英語検定協会が共同で開発した，大学で学習・研究する際に必要とされるアカデミックな場面での英語運用力を測定する試験である．日本の多くの大学でも入学審査の際に英語力の証明として採用されると見込まれる．

[5] 宇田川真介，長森清：グローバルエンジニア育成プログラム（平成 27 年 9 月 2～11 日）報告書，2015 学内に提出した上記の報告書に加筆・修正を施したものである．

[6] 茨城高専においては，海外大学などとの連携をはかり，情報交換，人事交流，ネットワーク構築を推進するために国内外を含む外国人研究者を招き，講演会を行っている．

[7] 平成 27 年度第 11 回教職員会議（品川キャンパス）にて報告したデータである．